

ヨーロッパでのツアーと新作公演を終えて、

「鏡と音楽」のリハーサルを始めた勅使川原三郎。

勅使川原が率いるKARASのメンバー、の中には

教鞭を取る立教大学の学生、そして昨年、新国立劇場で上演された

「空気のダンス」に出演して以来勅使川原作品の重要なメンバーとなった

十代のダンサーたちが、身体と思考を鍛えながら

作品に向けた課題を検証し、

新たな世界を探求している現場をのぞいた。

文◎稲田奈緒美(舞踊評論家)

勅使川原三郎

「鏡と音楽」

9月25日(金)～9月27日(日)

チケット発売中



鏡が光を反射するように、言葉によつて身体が何かを反射する、あるいは、身体という表面体で何かが乱反射するかもしれない。鏡を真正面から見れば映る像はひとつだが、斜めから見ると、見えなかったものが映し出され、あるいは合わせ鏡のように無限に像を微分してい

七月下旬のリハーサル初日は、バレエ練習用のバーを使ったエクササイズから始まった。ひとしきり身体を動かして、ダンサーの状態を確認した勅使川原は、川村美恵に言葉を使って鰐川枝里を動かすよう指示した。川村が浴びせる言葉に従って、低い姿勢から伸びあがるように全身を使って呼吸し、滑るように歩き、両腕を大きく広げる鰐川。すると今度は、佐東利穂子に川村の身体の動きを言葉で描写するよう指示を出し、川村の指示の出し方、佐東の描写の仕方にアドバイスをだしていく。他のダンサーたちは、三人の動きを食い入るように見つめ、一言も聞き逃すまいと集中している。厳しさの中に信頼関係と、次に起こることへの期待感が漂っている。

その間も勅使川原は自らCDを操作して、ロックやバロック音楽まで、テンポも曲調も異なる音楽を次々と流して、さらに指示を出していく。「佐東、即興!」「理二

光を乱反射し、
多様な像を映し出す鏡を
世界のメタファーとして考える

(加見理二、即興に加わって)「全員、ジャンプ!」「前へ!」「足は横!」……。勅使川原の要求は、過酷にして執拗である。川村らのシーンもジャンプも、ひたすら続けさせる。それはこのリハーサルが、すでに決まった動きをダンサーに振り移しすることが目的ではなく、課題を自らに仕掛けることで見えてくるものを組み立てていく、創造のプロセスの場であるためだ。ダンサーの身体から不要なもの、がそぎ落とされ、何かが生まれ、あるいは変容していく過程をじっくり観察するためには、妥協せずに時間をかける必要があるのだ。これは稽古の初日であつたが、今後さまざまな数多くの試みがなされるのであろう。

稽古場ルポ



くこともできる。映し出された像は、じつは現実ではなく、鏡の裏側に壊れた世界があるかもしれない……。勅使川原は鏡によつて映し出されるものと、映し出されないもの、そのズレや矛盾をダンスや世界の問題として捉え、身体と言葉によつて探ろうとしているのだ。

ただし、この知的な作業においても、音楽が加わることで感情や情緒的なものが生じる。リハーサルを見ても、音楽が変わった瞬間にダンサーの動きがフツと変化する様子がわかった。言葉も動きも、まるでシュレアリズムの自動筆記のように流れ出るのだが、単なる即興ではない。優れた芸術家ならではの視点で身体と世界を捉え、ズレや矛盾を引き受けながら新たな創造につなげようとする意思があり、同時に、音楽によつて漂う情感がある。美しくも厳しく、思弁的にして具体的、情緒的な身体が織りなす新しい表現が、生まれ出ようとしていた。